消費者ネットワーク

2005年11月1日
第101号

全国消費者団体連絡会
発行責任者　神田敏子
TEL：03-5216-6024
FAX：03-5216-6036

CONSUMERS.JAPAN

消団連とこのごろ

おもしろい本が出た。神里達博著『食品リスク～BSEとモダリティ』（弘文社）である。科学史が専門の神里氏がメインテーマにBSEを取り上げ、科学を歴史的に見る方法論によって「食品リスク」の正体を探ろうとしている。神里氏は冒頭で、「食」は豊か過ぎるほど豊かになったが、同時に不安が広がっている。不安とは形のない恐怖であり「妖怪」のようなものである。これまでは、これらの妖怪を近代科学技術の力で退治してきたが、今後も科学技術が解決してくれるとは限らない。むしろ妖怪を退治してくれるはずの科学技術こそが、実は妖怪の正体ではないのか、と投げかけて話が始まる。

ごく最近の病気であると思われているBSEを、300年近い時間軸の中に丁寧に位置付け、歴史的に分析していく。18世紀の羊の異変に始まり、今へと連なる長い時の流れの中で、BSEについて徐々に認識させていく過程が圧巻である。一筋縄には行かない病気であること、科学的にはまだまだ分からないことだらけであることが、具体的な研究や科学者同士のやり取りから、真実味を帯びて強く伝わってくる。

「プリオン仮説の最大の弱点は、試験管内で異常プリオン蛋白を作り、それを動物に摂取することで感染を引き起こすという実験が、一つも成功していないことである。これは他に「共犯者」がいるか、本当の原因が他にある可能性を示唆している」と指摘する。科学的知識は常に仮の姿をさらしているのであり、普遍的・絶対的な知識として社会に君臨するものではない、ということを説いているのである。最後に、「何が確実であるのかをいつも探って行くような、内省的な知性が最も重要であり、それこそが「妖怪」を退治する最も有効な手段である。」と締めくくって終る。

「科学」とは何か。科学を過信したり、忌避したりしていないか、そんなもやもやがす～っと晴れ、頭の中が整理された気がする。本当に読み応えがあった。多くの人たち、そして何か勘違いしている科学者・専門家の方々にも是非薦めたい「逸冊」である。

もくじ

消団連とこのごろ　・・・p.1
アメリカ産牛肉輸入再開問題の討議状況について　・・・p.2
内閣府 第20次国民生活審議会がスタート　・・・p.4
全国で消費生活条例の改正が進んでいます　・・・p.5
公正競争規約を知っていますか（その1）　・・・p.6
ＥＵにおける食品の表示と消費者の認識に関するレポート　・・・p.7
会員団体の活動紹介　・・・p.9
国民生活センターの事業から（くらしの情報交流プラザ、全国消費者フォーラム）　・・・p.11
お知らせ・編集後記　・・・p.12